



サンプル 魔法の、おちんちんガチャ♡

いば神円(しんえん)

貴女♀

不思議なガチャポンを発見する。お仕事は在宅ワークのフリーなクリエイター。昼夜が逆転している日々。

見付けたガチャおちんちん。

①対象者☆《朝が苦手な新人野球部の少年》

一人称・オレ

②対象者☆《上級生バスケット少年》

一人称・俺

③対象者☆☆《定期配達の青年》

一人称・おれ

④対象者☆☆☆☆《一階の若いサラリーマン》

一人称・僕

⑤ 対象者☆☆☆☆ 《深夜バイトの青年》

一人称・オレ

◆ 説明

一回ワンコイン、ガチャポンに入っているのは小さな、おチビちゃん。お湯に浸けると大きくなって、リアルな形、勃起おちんちんになる。でも射精させると消えちゃう、おちんちん。

《貴女》

ブロロロ……カコンツ。

ご近所さんのポストに新聞が投函される音が聞こえた。もう、そんな時間なのかと思ひ身を伸ばせば身体から、パキパキと音が鳴った。

グウウウ……

私は普段、フリーのクリエイター業をやっていて、起きている時間帯が不規則だ。朝方四時半、空腹の腹が鳴ってコンビニに行く事を決める。

パタパタ……

ネット上やメール、通話では確りとコミュニケーションを取るタイプではあるが人と対面するのは得意ではない。普段から、あまり人と会いたくない性分なので朝刊を入れる仕事人とも出来れば会いたくない。コンビニも自動販売システムが導入されたので、そつちを使う事が多い。家の鍵、札一枚とエコバッグを持ってジャージにサンダルで、パタパタ歩く。

「あ、なんかガチャポンがある」

歩いていけば今は閉まっている雑貨店前にガチャポンが置いてあった。一回百円らしい。

「今は小銭ないや」

都会のコンビニは知らないが我が素晴らしき住処の田舎のコンビニは日付が

近いモノは値引シールが貼られる。幕の内弁当が百円値引だった。コンビニで売れ残り幕の内弁当とシュークリーム三つを買って歩く。

特にコミュニケーションをするつもりは無かったけれど売れ残りが多いから値引シールを貼って買って欲しいと愛想を店員さんに見せられたので三つシュークリームを買ってしまった。言われて値引されてしまうと断れない。

「うーん、一回のみですなあ……」

帰り道、さつきと変わりない雑貨店前のガチャポン。お釣りは百円ちよつと、何のガチャポンか良く分からなかったが、こういうのはガチャるといふ行為のみが楽しかったりする。

「鍵のキンホルダーにでも、すれば良いや〜」

グルグル、ガチャンツ。

音が鳴って出てきたのは丸いケースに入った何か。その場で開けてケースは空入れのカゴに入れた。

「ブハツ！ なにこれ、ちんちんじゃんツ！ なにく？ 今って、こんなん売ってんの？ 規制とか大丈夫なの？ ウケンねー」

出たのは小さな萎えている男性器。私の小指サイズだ。

「あゝ……もしかして雑貨店の手作り？ ネットに写真は止めた方が良いかな？ 流石にこれは鍵に着けるキンホルダーにはなんないやアハハツ！」

爆笑しながら借りているマンションへと帰る。家に帰って付属されていた説明書を何となく読むと何やら大文字で「お湯に入れて膨らましてから使つてね♡」と書いてある。下の小文字の説明は読むのはダルくて後にした。

「使う？ ま、丁度良いしお風呂入ろっかな」

シャワーを浴びながら桶に湯を落としていく。その中に適当に入れた状態で身体を綺麗にし終わった。

「え……うわッ！　でっかくなってるッ！」

シャワーを終えて出るかとなつて、そういえばとチビ男性器を拾おうとして見れば何倍もの大きさに膨れている。それは、まるで本物の男性器みたいな見た目だ。十五センチぐらいいで、またリアルときた。

「わ……お湯で温かいから……すっごい、本物感ある……」

ズッシリとした男性器。ぱつと見、アダルトグッズのデイルド。

「百円でデイルド化するって考えたら、めちやくちやお得だけど、えく？　ちよつと、ちゃんと説明書読もうかね」

身体を拭いてデイルドも拭いて肌を化粧水で調べて弁当を温めながら説明書を読む。説明書の大文字の下には、こう書かれていた。

「これは魔法の、おちんちん♡疑似射精させると消えるよ。お互い楽しくスッキリしよう！　対象者☆《朝が苦手な新人野球部の少年》」

細かいキャラ設定まで、あるらしい。それにしても、どうやら、このデイル

ド、射精も出来るみたいだ。随分と高性能。雑貨店の誰が、どう用意したのかは解らないけれど優秀な能力の使い処が謎で笑える。そう思つて机に、ペタツとデイルドの根元を貼り付けた。

「いや……そう書いてあるだけで別に射精までは出ないか。うーん」

温めた、お弁当を食べながら、ジツと高性能な見た目をしたデイルドを眺めていると、どんどん人の、おちんちんが目の前にあるような気がしてくる。

「匠……」

幕の内弁当を食べ終わり、試しに男性器の亀頭部分を指平で撫でてみるとピクンとデイルドが動いた。

「え……す……」

お風呂から出て時間が経つたのに、まだ温かい。それに亀頭を撫でていけば先つぽの割れ目から我慢汁に似た湯が滲み出るし神経が浮かびだす。

「ふーん……」

コップのお茶を全部飲みきると歯磨きをしに立ち上がった。入念に歯磨きを
し終わりデイルドの前に座り直す。

「まさか味までは……」

興味本位で口を開けて亀頭部分を舐めてみる。舐めてみたらデイルドは、ピ
クピク反応した。

「あ……ちよつと塩っぱい……ニオイもゴムじゃなくてなんか……本物っぱい……」
ペロペロ……ペロペロ……

舐める度に反応を感じる。思い切つて亀頭全体を口に入れて舌を平たくして
動かしてみた。デイルドの硬さが増したかと思うと、ドロツと口いっぱい生
米の磨ぎ汁みたいな味が広がる。

「うえ……ッ」

テッシュを取って、べーつと吐き出す。吐き出してからデイルドを見るとピクピクと痙攣している。そして、みるみる内に小さくなったかと思えば、スーッと消滅してしまった。

「…………え？」

匠の逸品だと思っていたデイルドが消えて、もしかしたら根本的に、これは違うのではないかと私は思うのだった。

※※※
《朝が苦手な新人野球部の少年》☆

何だか股間がムズムズする。そろそろ朝練で起きる時間前だろうか。最近は、すぐ勃起してしまう。時間や場所なんて関係ない。授業中だって気付いたら勃起している事もある。

保健室の先生に訊いたら若い内は、あるあるらしい。保健室の先生は過去に何回射精出来るか試したら一日で十七回出来たらしい。オレも休日とかにしてみようかなって、ちよつと思つた。

そんな事を考えながら眠いので、うとうとしながら勃起を放置する。起きたら夢精しているかもしれない。だけど今は眠気を優先したい。眠い。

夢現。夢現の時は半分、金縛りみたいになる時があつて身体が不思議な感覚になつたりする。多分、その所為なのだろう。

オレの股間が妙に気持ち良い。もしかしたら無意識に何かに擦りつけている

のかもしれないけど眠いので放置だ。

だけど気持ち良い。童貞だけど何だか誰かに舐められているような気分だ。仮に幽霊にフェラされてるならスツピン美人が良いな。

何となく前に練習試合の為に普段より早めに出た日、ゴミ捨てをしに出てきたらしいスツピン美人の、おねえさんを思い出す。

一度で良いから、あんな、おねえさんにフェラチオされてイってみたいな。そんな風な事を考えていたからか、おねえさんの口内で出している想像をしながらオレは射精して再度、眠りについたのだった。

《貴女》

パタパタ……

深夜になり、ソツと雑貨店に向かう。ちよつと人目がある時に買うのは微妙だったので深夜だ。

今日は買い物のお釣りを入れていたクマの貯金箱の底の蓋を取って百円玉を用意した。小銭入れから一枚出してガチャポンに近付く。

チャリ……グルグル……ガチャンツ！

ドキドキしながら持つてるだけの百円玉を使い切り十三個の玉のケースをエコバッグに入れて家に持って帰った。また空ケースは後日、カゴに入れようと

思う。

「お湯は溜まつてるね。よし！」

出かけている間に溜めた、お風呂のお湯を見て一人頷き。玉のケースをポンポン開けていく。三つ開けて説明書を読む。

「対象者の部分だけ違うのかな？」

一つ目は、対象者☆《上級生バスケ部少年》湯船から取った桶の湯に入れる。二つ目は、対象者☆☆《定期配達 of 青年》これは湯船に入れる。三つ目は、対象者☆☆☆《一階の若いサラリーマン》ぼちゃつと用意した鍋の中に入れる。全部が膨らむ間に身体を洗って湯船へ入る。フーツと浸かりながら一本を手にとった。対象者バスケ部だ。見ると長細く十八センチぐらいある。ちよつと肌質が良い感じだろうか。

「よし……」

ゴクツと唾を飲み込み、それを舐めてみる。ビクツと驚いているのか揺れる

デイルド。だけれど、デイルドは、どうする事も出来ないので為れるがまま。

ちゅぷ……ちゅぷ……ちゅぽんっ！

「疑似射精って書いてあったし……多分、入れても大丈夫だよね……？」

そう呟いて風呂場の縁に腰かけると膝を開き割れ目に擦り合わせる。戸惑いを感じるデイルド。それを眺めていると徐々に私の大事な所から愛液が滲み出る。

「よ、よし、いれ……え？」

ビュルルルッ！

膣内に入れようと思った矢先、目の前のデイルドから白い液体が飛び出て縮

んでいき消えてしまった。

「は、はや……あく対象者が若い設定だと、そうなのかな？」

仕方ないので二本目を手にした。対象者が配達人のだ。

「ふ、太いな……」

硬くて太めの肉棒。長さは十五センチぐらいだろうか。輪郭が太い。

「もう一つは……」

サラリーマンのは十八センチ配達人のよりは輪郭が小さめだ。

「全部、入れなきゃ良いし……こっちにしよう」

ペロペロ……

先ずは、サラリーマンのを舐めて入れる準備をする。サラリーマンのデイルドは、そこまで反応はしないけれど神経が浮き出てきた。

れろれろ……ねろねろ……ちゅぽんっ♡

「今度こそ……んツ、これも太いかも……ツ」

先っぽを入れて少し止まり、ふー……つと深呼吸をして先っぽを入れたり出したりを繰り返す。

くちゅ……ぬちゅ……ぬる……♡

デイルドの方からも我慢汁が出てくるので徐々に入っていく。

「あー……んツ、入った……♡」

全部では無いけれど三分の二まで入れて、ほうつと息を吐いた。

「そうだ……これってデイルドだし下の部分、貼り付ければ良いんだ……」

お風呂場の壁に、ペタツとデイルドの底を貼り付けて湯船の中で縁に手を置いて腰を前後に動かす。

ぬぷ……♡ ぬぷ……♡ ぬぷんツ♡

「んツ♡ あツ♡ あふ……ツ♡」

何だかバツクで後ろから突かれているみたいなきもちになってくる。私は夢中で身体を前後に揺らし熱が上がり五分程、経った時、内側に温かい液が広がるのを感じた。

「んあ……♡ そっか、終わりだ……」

ぬぼんツ♡

デイルドから離れて振り向く。デイルドはビクビクと痙攣していて白い液体まみれだ。

「じゃあ、この太いのを使ってイこう……♡ あと、ちよつとだもん……♡」
 太い配達人デイルドを舐めてお風呂場の縁に貼り付けると、上に乗る形でヌプヌプ入れていく。

「はあ……♡ はいったあ……♡」

頑張つて腰を動かして喘ぐ。

「あふ♡ あツ♡ ふとお……♡ あツ♡ きもちツ♡ あく♡ イくツ♡
 イくう♡」

ビクビクと身体が跳ねて高みを味わっていれば内側に、ドルツと重い液体の感触。どうやらデイルドの方も射精したらしい。

「ふー……あれ？」

余韻を感じながら目の前を見て首を傾げた。壁に付けたデイルドが、まだ消

えてないのだ。

「あれ？ 一回射精したら消えるんじゃない？……？」

ぼーっと眺めて、そういえばと自分の膣内に入った状態のデイルドも消えていない。

「なんでえ……？ ん……ツ♡ じゃあ、もう一回しよつかなあ……♡」

腰を揺らしながら前側のデイルドを口に含み。壁に手をつけて出し入れをする。

「んぷツ♡ んう……♡ んく……♡」

何だか二人に前後から、えつちをされている気分だ。フェエラをしながらデイルドを繰り返し出し入れしていれば内側に再度、液体が飛び出る感覚がした。

「あえ……？ あ、消えたの……？」

どうやら配達人のデイルドは二回射精させると消えるタイプだったようだ。「あ、もしかして☆の数が射精回数？ じゃあ……このサラリーマンのは☆が

三つだから……三回？」

一度、湯に入り身体を温め治すと湯船から出る。精液は何時の間にかデイルドが消えた後に消えたらしい。

「あと二回かあ……」

お風呂から上がって身を調べデイルドを撫でながら考える。正直、もう一回イったので満足感があって二回目となると疲れそうだ。

「うーん……でもなあ」

この状態で放置するのも、どうかと思う。一度、スナックパンとお茶を口にして机に貼り付けたデイルドを眺める。

「それにしても、おつきい……太さは、さっきの配達人設定の方だけど充分というか……よし、もう二回、頑張るか！」

食事をする体力が戻ったので、パクツとデイルドを口に含む。ネット通販

で肌に良いローションを注文したので明日には届く。そうなたら口ではなく、ローションを使って滑りやすくするのも良いんじゃないだろうか。

そんな事を考えながら我慢汗が、たっぷり出たディルドを見て私は机に上った。机の上で脚をがに股に開き手を机について頑張つて内側に入れていく。

又チ……又チ又チ……♡ ぬぶ……♡ ツ♡ 又チユ……又プンツ♡

「はツ♡ あツ♡ んあツ♡」

頑張つて机に両手を付きながら腰を上げ下げする。気持ち良い。けど普段からの運動不足が良くない。直ぐに疲れてしまう。

「はあ……♡ すっごい疲れる……でも気持ち良い運動って考えたらアリかな？」
運動不足過ぎても良くないし毎日、これをすれば二重の解消じゃないだろうか。

「んあ♡ 奥っ♡ すっごいッ♡」

奥に、おちんちんを押し付けながら腰を小さく前後に揺する。するとディルドから、ビュルビュルと射精液が飛び出た。

「おあ♡ あん……ッ♡」

射精液で滑りが良くなった。痙攣しているけど萎えていないので続けて腰を大きめに前後に揺らす。ディルドから戸惑いのようなモノを感じたけど関係ない。

ヌプンツ♡ ぬちぬち♡ ヌプンツ♡ ぬちぬち♡

「あッ♡ あッ♡ イッ♡ いくうッ♡」

中の勃起おちんちんを締め付けながら高みを感じていれば内側で射精感。

びゆくツ♡ びゆるツ♡ びゆるツ♡ びゆるツ♡

細かい射精を数回出してデイルドは消えたのだった。

※※※
《上級生バスケット部少年》☆

深夜。何かムズムズする感覚で半分、起きた。でも眠いし朝も早いので眠ろうとする。

多分、よく起きる勃起だろうと思う。眠気の方が優先なので放置だ。俺は夢の世界に入りながら、おねえさんに犯されそうになっている夢を見る。

おねえさんは裸で俺の、ちんちんを舐めているのだ。想像の中の彼女は前にコンビニで擦れ違ったスツピン美人。化粧したら、より映えそうだけど私服で素のまま過ごしている姿に、ちよつとグツときた。あと自然体の、おっぱいが大きくて柔らかかそうで良いなっと思った。

部活で忙しいけど休日は、あんな年上彼女の家で過ごしてセックスとか出来たら良いなあ。

股間の気持ち良さを感じながら俺は、おねえさんに入れようと想像して、そ

れだけで射精をしてしまったのだった。

※※※
《定期配達の青年》☆☆☆

今日も仕事は大変だった。体力はある方だけど、ずっと、この仕事を続けていくかと言われると、どうなんだろうか。

早めに眠りにつき一時は眠ったが深夜に目が覚めてトイレに行つて尿を済まし水をコップ一杯飲んで布団に入り込む。

給金は良いが他の仕事を考えるべきか体力作りでもして、ずっと続けられるように生きるべきか。

ぼーっとしながら眠気を待つていたら股間がムズムズしだした。おれは疲れから来る勃起かなつと考える。

「……」

そういえば最近、抜いてないなと思ひ布団を外してスウェットのズボンを下げる。ボロンと勃起している肉棒が飛び出た。妙に元気だ。

「あー……滑り要らないかな……」

風呂上がりの際に使っていたバスタオルを探す。適当に座椅子の上に放置してたみたいだ。

「ん……ッ♡ 触ってないのに、なんか……ッ♡」

変な感じがする。何か女性の膣に包まれているみたいだ。

「なに、これッ♡」

まさかの怪奇現象だろうか。幽霊に犯されている？

そんな事があるのか。否、現在、起きている。

「ヤバいッ♡ こえーのに気持ち良い……ッ♡ おれ、受けとか無理だと思っ
てたのに……うぐッ♡」

バスタオルを尻下に敷いて座り。成り行きを眺める。

目の前にはガチガチに勃起している、おれの、ちんちん。我慢汁だらけで、ちんちんは何か女性器に包まれている感覚で、前後に動かされ今にも射精しそ

う。

「あー……♡」

幽霊は怖いのでせめてオカズは他を考えよう。オカズ、オカズ。最近、気になる相手っていただろうか。

周りに女性は、あまりいない。出会ったとしても既婚者ばかりだ。独身で綺麗そうな気がする子。芸能人よりは身近から選びたい気がした。

「……そうだ」

顔は一度しか見た事が無い。定期配達先の女性。前に定期配達じゃない冷凍食品を届ける事になった時に一度だけ顔を見た。他の時は常温なので置き配だ。その時に専用のポストを開けると板に書かれたメッセージが毎回ある。

『何時も、ありがとうございます。荷物は此処へお願いします』そんな感じの言葉がカップやブタやらコミカルな絵と共に描かれて置いてある。ちよつとした癒しだ。

瞼を瞑って彼女の事を考えながら気持ち良さを味わう。気付くと腰を前後にカクカク揺らしている自分がいた。おれは彼女を後ろから突いているイメージだ。

今後、どんな気持ちで配達すれば良いのかとも思ったが妄想は止まらない。

「あぐううツ♡」

ドルウツ♡

重い精液が出てバスタオルに、ドロツと落ちていく。

「あー……イった後も包まれてる感じ良いツ♡ 中出ししてるみてえ……♡」
瞼を瞑りながら余韻を味わっていれば動き出す。見えない何かは敏感な、おれの状態お構いなしで動き出している。

「うおツ♡ おツ♡ おあツ♡ ちよ、ちよつと休ませてツ♡ んぐツ♡ ぐうツ

♡ あゝ……♡ やべえ♡ くそ気持ち良いッ♡」

瞼を瞑つて腰を大きく振りながら彼女とのセックスを想像し悦に浸った。肌の白い柔らかな尻に、パンパン押し付けて射精。

「おッ♡ おッ♡ おあゝッ♡」

ぐりいっと押し付けながら、おれは彼女の中へ残る精液全てを注ぎ込んだ。「……やばあ♡」

布団に倒れ込みながら、おれは久々の発散に満足し深く眠りについたのだ。た。

*
《一階の若いサラリーマン》☆☆☆

会社の同僚と食事をして電車に乗らず出来るだけ走って帰宅。帰宅するとシャワーを浴びて明日のお米を炊飯に浸けて予約。その後、ベットに潜り込み就寝。朝は米の炊けた匂いと共に起きてからストレッチをし休日に作り置きしたオカズを弁当箱に詰め残ったご飯で朝食を食べ出社。

それが平日のよくある僕の行動だ。趣味は昔からしているランニングと料理、暇潰しの映画観賞。それ以外は仕事と同僚との会話が日常になっている。休日は朝にストレッチをしてから近所の運動公園で午前中走り。買い物はスーパーでして食事をし一週間分の弁当用の作り置きを用意。夜は何かしら食べながら契約しているサブスクで映画を観て就寝。次の日は作り置き以外は同じような一日を過ごす。

映画を続けて三本観て彼女でもいれば、この時間が違うのかもしれないと少

しだけ考える。とはいって中小企業の仕事場は既婚者ばかりで独身の女性は少ない。居ても誰かしらと付き合っているし、そこまでして会社内で恋愛したいとも思わない。

ぼんやりと考える。同僚と行く飲食店の従業員やパン屋のバイトの子。

「うーん……」

これといつて縁が在るわけじゃ無いし性欲も薄い方だ。真面目に恋愛するとなったら面倒くさい気もする。合コンやら街コンやらすれば良いのかもしれないけれど面倒くさい。僕は、お酒が好きじゃないし、合コンは飲むイメージだ。街コンは分からないけれども。結婚相談所とかの方が良いのだろうか。そんな事を、ぼんやりと考えながら僕は就寝する。

深夜。何やら身体が熱くて目が覚めた。股間がムズムズする。

「……んツ♡」

何だろうか。布団を捲れば珍しくフル勃起した自分の下半身。

「最近、抜いてなかったからかな……」

寝間着用のラフな半ズボンと下着を掴みゴムを伸ばす。内側ではビキビキと神経を浮かばせた性器から我慢汁が、だらだら垂れている。

「抜くかー……」

トイレに行くかベツトかソファーでするか考えながら、タオルをカゴから出してソファーに座る。ソファー前にテッシュ箱があるので終わったら拭いて軽く性器だけシャワーで洗い流してから寝よう。

下着ごとズボンを脱いでタオルを尻下に敷いて妙に勃起した自分の性器を眺めながらオカズを何にしようか考える。

「……うツ♡ え？」

そう考えていれば何やら誰かの口に入れられたような感触。戸惑いながら自分の性器を見て股間周りに手を通してみるけど何かと触れ合う事は無い。

「……夢じゃ、ないよね？」

性とは違う意味合いでドキドキしながら舐められているであろう自身の股間を見つめる。戸惑い恐怖。幽霊に舐められているのだろうか。悪寒はしないけれど他に思い付かない。

「うツ♡」

両膝をソファアーに上げて身を一回丸めてみるけれど効かない。タオルで隠してみても関係ないみたいだ。

「ンあツ♡」

柔らかいモノが僕の性器を包んでいく。これは女性器なのではないか。大学時代に一度だけ彼女が居てセックスをした時を思い出す。彼女に別に好きな人が出来て振られて別れた苦い思い出。特に未練は無かったけれどセックスってこんな感じだった気がする。

「……いや、女性器が、かツ♡」

これがセックスだと言ったら語弊がある。僕の目の前には相手はいないのだから違う。

けれど、何だか温かいし、これは本当に幽霊なのだろうか。少しずつ僕の性器を飲み込んで徐々に動きを早くしていく。僕を犯す何かは繰り返し繰り返し。

「うあくくくツ♡」

ビクビクと身が跳ねて射精した。

「はー……♡ はー……♡」

思いつきり膣内射精した気がする。そんな感触だった。

「一体何が……」

少しずつ落ち着いてきた処で、まだ勃起した状態の自分の性器を見る。何かは居なくなっただけどもズムズは治まらない。

「……」

シャワーでも浴びながら、もう一回抜こうかと思っていると、パクつと口に

含まれた感触。

「も、もう一回するの……？」

少しだけ期待を込めて、ソファアに沈み込む。僕の性器を誰かが舐めている。謎の怪奇現象。

「こ、こんなツ♡ 犯される日が来るなんてツ♡ んツ♡」

舐められながら腰が、カクカク揺れる。何かの舐め具合にイキそうになっていると、ピタツと止まってしまった。

「え……？ あれ？ ここでツ？」

戸惑いながら声をかけるけど、また舐めてくれそうにない。仕方ないので薄暗い部屋の中、テツシュで拭いてからシャワーを浴びに向かう。

「あ……上の階も深夜風呂かあ」

浴室に入ると上からの排水の音が反響して生活音を感じた。そういえば上の階は女性が住んでいた。

此処に引越してきて粗品を渡しに行った時に一度だけ顔を合わせたのを覚えていて。どうも夜型の在宅ワーク勤務のタイプらしい。青白い肌でスツピンでも美人だった。

最初は下半身だけ洗って出ようと思ったけれど一度、裸になって何となく彼女の事を考えながら抜く事にした。桶椅子に座りながら洗面所棚下に入れておいたローションを手垂らす。

「この怪奇現象の相手が、あの子だったらなあ……」

睾丸を軽く揉みながら彼女の口で愛撫されるのを想像する。

「えッ♡」

睾丸を揉みながら想像していたら再度、舐めてくる何か。否、想像の上の階の、あの子だ。口内で優しく舐めて唾液を広げようとしている感じがする。皮の中まで丁寧に、えっちだ。

「ん……♡ いいよッ♡」

舐め具合を褒めていたら口が離れ膣内に性器が入った感触がした。

「はッ♡」

僕は瞼を瞑りながら膣内を味わう。

「うッ♡ あッ♡ あ……くッ♡」

先程より奥へ入っている気がする。僕のを全部、包む気だろうか。

「せ、積極的だね……ッ♡ んうッ♡」

温かいシャワーを出しながら浴室の壁に両手をつけて腰をカクカクと動かす。想像では僕が彼女の中に入れて動かしている。現実とは違うけど、この快樂の前では些細な事だ。

「あー……ッ♡ 出るッ♡ 出すよッ♡」

ビュルビュル♡

二回目の射精。学生依頼だ。こんなに短時間で二回目の射精をしたのは、そう考えていれば何かの動きは止まらない。

「えッ♡ ま、まっつッ♡ こ、これ以上は、くるしッ♡ あッ♡」

風呂場のタイルに腰をつき、のしかかられ彼女が上に乗って無理やり腰を動かすのを想像する。想像は今までの中で一番上手くでき、興奮して性器が硬く膨れる。三回目だというのに射精感が再度、近付いてきた。

「ひぐッ♡ うッ♡ ああッ♡ あー……♡」

びゆくッ♡ びゆるッ♡ びゆるッ♡ びゆるッ♡

情けなく腰を揺らしながら射精をして奥から全部出し切ると今度こそ消えた感覚。少しの間、風呂場で温かいシャワーに当たりながら、ぼーっとして僕は余韻を味わったのだった。

☆☆☆サンプルはここまで！

続きは本編で！

☆☆☆

サンプル 魔法の、おちんちんガチャ♡

発行日 2024年7月5日

著者 いば神円(しんえん)
<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
